

白馬杓子沢（五月運営委員会山行兼納会）

1989 5/27~28

西川L、菅沼、矢野、手塚、鈴木（鉄）、岡坂、井村、
柴崎、岩崎、水野

前日夜行アルプスで白馬へ、そこからタクシー2台に分乗して猿倉に入った。駐車場には、10台近くものクルマが並んでおりパーティーの多いことがわかる。猿倉荘の前に、どっかとテントを張り不用なものをデポし朝食を済ませて早々に出発した。途中、嫌らしい土石流の跡を渡り、しばらくしてシール歩行となった。独り矢野さんだけはツボ足で歩いたが、それがいかにも矢野さんらしい。各自のペースで登り次第に先頭の西川さんと最後尾の菅沼さん(?)の差がひらいく。その差は時間にして優に30分。途中、急坂でスキーを脱いで稜線まで登った。いままではっきりしなかつた天気も、稜線に出る頃には快晴となった。但し風は強かった。今年は雪が例年になく多く稜線にもしっかりとついている。最初の話合いでは数人の杓子沢組以外は罫沢を滑ることになっていたが、罫の急坂をみて全員一致で杓子沢滑降と相成った。

いよいよ滑降、いままでの疲れも忘れて心沸き立つ。柴崎さんを先頭に滑り出す。斜面は、出だしが緩やかで途中落込みまた緩やかとなる。雪はちょっと重たく手こずった。見え隠れする石に板が泣く。振り返れば、杓子沢が両側岸壁に挟まれなかなかの絶景。かなりの急斜面を滑ってきたような錯覚に捕らわれる。尾根で小休止、とにかく暖かい。少し登り返して、長走沢を滑った。先ほどよりは雪が締まっていて気持ちよく滑れる。降るに従い、斜面が荒れてスピードは出せなかったが、皆の顔は満足そのものだった。

新緑を楽しみながら猿倉までわずかな道のりを歩いた。猿倉に着くと早速冷やしておいたビールで乾杯したが、3リットルでは喉の渴きは癒せなかった。西川さんはここで東京に帰り、残りで納会鋤焼きパーティに突入した。各々に満足した様で、肉も少々残った。そこに岡坂さんがひとりクルマで駆けつけ合流し第二ラウンド開始となった。

さて、翌朝は小雨の中、岡坂、柴崎、手塚、井村の4名はスキーを担いで大雪溪へ出陣、残りは東京へ帰ることになった。

(水野記)

コースタイム

猿倉6:45→大雪溪7:35→稜線11:00→杓子沢コル11:50→(滑走)→
小休止地点12:40/13:00→尾根13:20→(滑走)→猿倉14:35

